火山とともに生きる

西暦二〇XX年。九州の霧島火山帯で超巨大噴火が発生。一時間で南九州は壊滅し、噴火後の二四時間で死者は三五〇万人以上、被害額は二千兆円―。

小説家の石黒耀氏が「死都日本」（二〇〇二年刊行）で描いた未曽有の火山災害は、著者の豊富な科学的知識の裏打ちもあり「単なる作り話」と言って片付けられないリアリティーがある。

「火山学的に見れば『死都日本』で描かれた火山災害は、近未来に現実のものとして起こりうるもの」。火山学者高橋正樹氏も著書でこう評した。

高橋氏によると、過去に大噴火を起こしたカルデラ火山は、長い休止期間を経て超巨大噴火を繰り返すくせがあるという。過去の噴火の平均間隔などを元に推定すると、こうした噴火の危険性が高いのは屈斜路カルデラ、次に阿多カルデラ（鹿児島湾）や洞爺カルデラだという。

五月二九日の鹿児島県の口永良部島・新岳の噴火。爆発的に立ち上る黒い噴煙や斜面を滑り降りる火砕流を見て、そんなイメージが脳裏をかすめた。

昨年九月、死者五七人、行方不明者六人という戦後最悪の火山災害となった御嶽山の噴火をはじめ、箱根山、桜島、浅間山など日本列島の異変を予感させるような不穏な活動が最近目立つ。道内では、室蘭地方気象台が、登別温泉の地獄谷を含む活火山の倶多楽火山（登別市、胆振管内白老町）にも一〇月一日をめどに火山情報「噴火警戒レベル」を導入することを明らかにした。

火山噴火予知連絡会の藤井敏嗣会長（東大名誉教授）の見立てによると、日本の火山は一九二九年の駒ケ岳の噴火以降の静けさがむしろ異常で、現在の活発化は「普通の状態に戻った」ということらしい。二〇世紀後半からのマグニチュード九級の巨大地震五回の後、例外なく数年以内に火山が噴火したという（六月四日付日本経済新聞朝刊）。

東日本大震災での地殻変動が、日本列島の火山の活発化をもたらしたのだとしたら、「死都日本」に描かれたような大規模噴火には至らなくとも、近い将来に身近な火山で噴火があるかもしれないと想定しておいた方がよいだろう。

火山防災の成功例としてよく取り上げられるのは、一五年前の有珠山噴火だ。火山噴火の中では決して大規模ではなかったが、長年、北大有珠火山観測所（当時）を拠点に同山を観察し続けた岡田弘北大名誉教授が的確に噴火を予測し、人的な被害は出なかった。

住民避難が比較的スムーズに進んだのは、噴火当時の岡田氏や関係者の適切な判断もさることながら、噴火に対する住民の心構えが醸成されていたことも背景にある。

岡田氏は、一九七七年の噴火など過去の有珠山の歴史を踏まえ、胆振管内壮瞥町など地元自治体と連携し、火山防災の必要性を熱心に説き続けた。住民向けの講座だけでなく、地元メディアなどを同山に案内し「有珠山は三〇～五〇年周期で噴火する」という意識を繰り返し植え付けた。

「主治医」が常駐していた有珠山の防災体制は、ある意味で理想型かもしれない。活火山を抱える自治体は、こうしたプラスの教訓を生かすべきだ。専門家の力を借りながら、住民の意識付けや避難体制づくりを積極的に進めてほしい。

狭い国土の日本に世界の活火山の七％が集中し、道内だけでも二〇の活火山がある。予測困難な自然災害を最小限に食い止めるには、住民と関係機関などとのリスクコミュニケーションが欠かせない。私たちは火山とともに生きているということをあらためて胸に刻みたい。

＜聖＞